

巻頭言

大災害被災地で生まれる新たな文化

国立民族学博物館名誉教授
人と防災未来センター震災資料研究主幹
林 勲 男

被災地の人びとが生活を立て直し、社会関係を再構築していくプロセスにおいて、その地域の文化や人間関係がどのように作用するのか、また、そうした地域文化や人びとの関係性自体が被害を受けた場合に、その修復はいかになされるのかについて関心を持ち続けている。注目するのは、発災以前からの文化だけでなく、被災という状況下やその後の復興の過程の中で生成する新たな文化をも含んでいる。ここでは、いくつかの大災害後に生まれた文化について見ていくこととする。

歌

私にとっての最初の被災地調査は、1998年7月に発生したアイタベ津波災害の被災地であった。パプアニューギニアを人類学研究のフィールドとしていたため、現地調査の依頼を受けた。内陸に新たな集落をつくり、5年後には若者たちが家族を失った悲しみを歌にし、追悼式などで披露するグループを結成するようになった。その歌の内容は、災害によって失った家族と過ごした楽しい思い出と、二度と会うことのできない愛慕の情である。偶然にも、2007年度の「防災教育チャレンジプラン」で特別賞を受賞した大船渡市立綾里小学校の児童たちによる劇「暴れ狂った海」の主題歌の歌詞によく似たものであった。大きな違いは、前者が抑えがたい悲しみの表現に終始しているのに対して、後者は地震・津波についての知識を深めると共に、発生時の適切な判断力を養う活動の一環としての劇や歌であるという点である。天明3(1783)年の浅間山大噴火の様子や被害の状況さらには地域社会の再建までも歌った「浅間山噴火大和讃」は、明治になってから創られたものであるが、現在でも群馬県嬬恋村鎌原で彼岸や盆に唱えられ続け、約240年前の出来事を今に伝えている。そして、2004年のインド洋大津波災害では、インドネシアのシムル島において、約100年前の津波災害に基づいた歌(叙事詩) **Nandong** が人口に膾炙していたことで、地震発生時に沿岸部にいたほとんどの人びとが高台に避難したことが世界から注目

された。

被災地で生まれた歌としては、阪神・淡路大震災後の「しあわせ運べるように」が良く知られている。その後の大規模災害被災地でも、歌詞の中の「神戸」を新たな被災地の地名や「ふるさと」に代えて、復興に真摯に向きあう姿勢を示すものとなっている。東日本大震災後にNHKの復興支援プロジェクトのテーマソングとして生まれた「花は咲く」も、悲しみを乗り越えて未来へつなぐ希望や願いを歌っている。さらに歴史を遡れば、昭和三陸地震(1933年)後に岩手県で「大津浪記念歌」として「慰霊の歌」と「復興の歌」が作られ、県内の沿岸部を中心に慰霊祭などで歌い継がれていたが、太平洋戦争を境に歌われなくなってしまっていた。それが東日本大震災後に釜石市で録音テープが発見されたこともあり、ふたたび注目され、歌い継ごうとの活動も始まったという。これらの歌が歌われるのも、発災日に催される追悼・復興祈念式典などにおいてであり、過去の災害を振り返ると共に、将来の防災・減災への取り組みに心を新たにしている機会ともなっている。

以上見てきたように、大災害後に生まれ被災地で歌い継がれてきた歌といっても、喪失による悲しみの感情、そうした悲しみを乗り越えて前進しようとする姿勢、災害発生から復興までの史実の描写、災害発生時の行動規範などに関する様々な内容となっている。

語り

東日本大震災が発生して日数もさほど経たないうちから、この災害の経験が風化してしまうことを懸念する声がテレビや新聞などで伝えられた。そして、それに呼応するように、『日本三代実録』に記された貞観地震や、明治と昭和の2度の三陸地震津波災害当時の記録や経験の伝承の在り方について改めて関心が集まった。東北地方太平洋岸に数多く存在する津波碑やそれに刻まれた文言などが、当時の人びとが経験したことを後世に残そうとした努力と共に紹介された。

東日本大震災発生後の注目すべきものとして、災害経験を語り継いでいこうという被災地の人びとの活動がある。一般的には「語り部」と呼ばれ、もともとは神話や歴史、民話などを言葉で語り継ぐ人びとを指していたが、近年では昔の暮らしや戦争、公害、災害などでの自らの経験を、自らの言葉で語る活動が注目されるようになってきた。そして、国立の博物館である昭和館では、太平洋戦争中および戦後の日本人の暮らしについて伝承する語り部の育成を事業の一つとしている。

災害に限ってみれば、語り部の活動は日本に限ったことではない。2004年のインド洋津波災害の被災地であるバンダアチェでは、災害の直接経験者たちが自らの経験を語る場を津波ミュージアムが提供している。そのアイディアは、人と防災未来センターをはじめとする日本の災害関連ミュージアムを訪れた2代目の館長が持ち帰ったものである。災害関

連のミュージアムや伝承施設が、直接経験者に語り部活動の場を提供している例は多くあり、とりわけ東日本大震災被災地では、災害の語り部活動が、新たに開設された伝承施設内で講話としてスケジュール化されていたり、被災地ツアーとして展開している。

災害経験者が自分の体験を語ることは、ビデオ映像の上映を含めれば海外でも多くの災害関連施設でおこなわれている。管見では、近年のものだけでもハリケーン・カトリーナ災害を展示するルイジアナ州立博物館（ニューオーリンズ）や、カンタベリー地震の展示施設である *Quake City*（クライストチャーチ）などがある。語り部個々人の体験やそれが持つ意味合いは多様なものであるが、そうした語り部たちが団体を形成し、それらの団体が連携した活動を組織的に展開するまでになっているのは、日本、特に東日本大震災以降の語り部活動の特徴のひとつであろう。岩手・宮城・福島の3県で活動する「3.11メモリアルネットワーク」はその代表例である。活動を相互に学び合い、関連施設を視察し、研修を通じて研鑽を積んでいる。また毎年、過去の大災害被災地で開催されている「全国被災地語り部シンポジウム」も語り部同士を結びつけ、災害を語り継ぐことによって、将来の災害への備えにつなげていこうとしている。語り部というと年月の経過に伴う高齢化が問題とはなるが、語り部の活動を知り、他の被災地を訪れて語り継ぐことの重要性・必要性を感じ、活動に参加する若者たちも育っているのも事実である。そうした若い語り部たちの活動にいかにか持続性をつけていくかが課題である。

防災オペレッタ

最後に、私が関わっている防災関係のNPOで、小学校低学年とその保護者を対象とした「防災オペレッタ」の試行を始めていることを紹介したい。プロの声楽家とピアニストの賛同と協力を得て、大地震とりわけ東日本大震災を引き起こしたような長周期地震動の発生によって、家の中ではどのようなことが起こるのか、その被害を事前に防ぐには何をしておく必要があるのかを、歌によって進行する物語を楽しみながら学んでもらうのが目的である。手探り部分もかなりあるが、現在はキャラクターで被害を表現し、観客にも簡単な動作と歌で参加してもらおうというものである。防災・減災の知恵を育むこと、地震による危険から自分の命や身体を守ることの大切さを子どもが幼い頃から親子で考え、家族で実践してもらえようにとの企画である。歌、物語、複数のキャラクター、身体を動かす、というのがポイントであり、絵本『ひかりのまちのまもの』や先に紹介した被災地で生まれた文化からも多くの示唆を得ている。さらに上演回数を増やしていきたい。

参考文献

岩手懸編 (1934) 『岩手懸昭和震災誌 於：昭和八年三月三日』(国立国会図書館デジタル

コレクション「津波ライブラリィ」)

大船渡市立綾里小学校 (2008) 『暴れ狂った海』 実践報告「2007年度防災教育チャレンジプラン」<http://www.bosai-study.net/2007houkoku/plan03/index.html>

東京都・新潟県・静岡県・愛知県・京都府・大阪府・兵庫県・徳島県・福島県 (企画・制作), 特定非営利活動法人 防災デザイン研究会 (監修) (2011) 『次の巨大地震に備える 高層ビル室内安全ブック うごく・たおれる・とぶ・おちる+われる～長周期地震動で家具が凶器に～』 https://add.or.jp/projects/documents/20110916_U-T-T-O.pdf

林春男, GK Kyoto 企画・構成・ストーリー (2001) 『ひかりのまちのまもの』 理化学研究所地震防災フロンティア研究センター